



編集月旦 2013年3月号

★青少年用の「モノ・居場所・しくみ」、中年者用の「モノ・居場所・しくみ」、高年者用の「モノ・居場所・しくみ」、そしてみんなで使う「モノ・居場所・しくみ」、調整の中心になるのが「三代会館」。中学校単位の地域に地域大学校と地域包括センター。それが「日本長寿社会」のモデル。

★「アベノミクス」効果に浮かれすぎていないでしょうか。次第に確実に拡大してゆく各界の格差。先人が労苦してこしらえた「大同型社会（九割中流）」が、目の前で解体していきます。みんなが等しく豊かになる方向を見失ってまで「アベノミクス」に期待していいものかどうか。安倍総理の所信表明演説にも施政方針演説にも「高齢者参加」を呼びかける文言は見出せません。ですからこのまま任せておいては高齢者が安心して暮らせる社会にむかうことはないようです。

☆円安・株高に示される国際評価については、①未曾有の「天災人禍」への沈着な対応、②アジア途上諸国の近代化に資する技術伝授、③産業立国、④平等社会、⑤平和維持、⑥長寿世界一などへの評価が合わせ関わって表現されたものですが、その多くはいま高齢者になっている人びとへの敬意と期待によると推察しています。それならば高齢者が総力をあげて誇りある「高齢社会」をつくることも要請に応える事業といえるでしょう。

☆「イノベーション（萎縮）」からの脱却を掲げた安倍政権の「成長戦略」をしくじると「財政巨大赤字・企業収益格差・国民世代不和」によってこの国は自力浮揚の方途を失うことになりかねません。いまこそ3000万人一人ひとりの自力による「成熟戦略」が「イノベーション（萎縮）」からの脱却への回答です。

★「国民の活力」というと、すぐ若年層の「成長力」に求めるのが旧来の思考です。「世代交代論」がそれ。増えつつける高年者層の優れた「成熟力」「継承力」によって新たに形成される経済社会は、持続的成長力をもっています。その理解のためには「多重型思考」が必要です。「日本長寿社会」は「三世代多重型社会」なのですから。それによって初めて国民の全活力による「経済全体のパイ」が見えてきます。

★「独り暮らしの高齢者」が増加すれば、おのずから「孤独死・孤立死」も増えざるをえないでしょうが、実のところその数がわからないようです。そこに至る孤独な日月を合わせ思うと、とてもこの国が途上国のモデルになるような「高齢社会」に向かっているとは思えません。どうしてこんな国になってしまったのか、どこへ向かおうとしているのか。

★「ナノコーポ」（小規模高齢起業）が水玉模様のように各地にひろがっています。高齢社の上田（研二）さんは伝道師のようにその「ノウハウ」を伝えて多忙なようです。取材した同社の「かじワシ」は仁木（賢）さんの企画による「女性版」です。月に5万円ほどの定収入を得て無理なくしごとをする喜びは無償ボランティアとは異なった充実感を与えてくれるようです。

★新たな時代の内容を盛るために、新たなことば（器）が必要になります。『日本長寿社会』のパラダイムシフト」を特集しました。いくつかの聞き慣れないことばもありますが、意味合いに納得できたら使ってみてください。ご意見・ご異見をお寄せください。

★一人ひとりが長寿であること、長寿になることを喜んで暮らせる「日本長寿社会（高齢社会）」の達成とアジアに住むみんなが力を合わせてつくる「アジアの共生（豊かさの共有）」の活動は、ふたつながら平和の証であり日本高齢者の課題であり本誌の課題です。（編集人・堀 亜起良 堀内正範 記）

クロとまど ちあき

